



# 最強Fランク冒険者の 気ままな辺境生活？ 3

ALPHAPOLIS

紅月シン  
*Shin Kouduki*

アルファライト文庫 

## テレーズ

『聖神教』の  
最高権力者。  
信仰に対して  
非常に敬虔。

## アリエル

『聖神教』という  
宗教団体で  
『聖女』と呼ばれている、  
エルフの少女。

## フルール

「下っ端」を自称する  
Aランク冒険者。  
今はロイの教育係。

## シルヴィ

Sランクの称号を持つ  
世界最強の魔導士。  
ロイの魔法の師でもある。

## セリア

ルーメンの街にある  
小さな宿屋の娘。

## ロイ

Fランクの冒険者。  
自身が規格外の実力を  
持っていることに  
ようやく気付きはじめた。

## プロローグ

クラルス王国の国王である青年は、眼前の光景に思わず溜息なめいきを吐いた。彼の机の上には、今日中に片付けなければならぬ書類が積つまれている。

あまりの量の多さに、向こう側がわが見えないほどだ。

必要なものと理解していても、気が重くなる仕事だった。

しかも、最近は何を追うごとに作業量が増加している。

今はまだ何とかなっているが、この状況が続けば、いずれ確実に自分の処理能力が限界を迎むかえるだろう。

先のことまで考えると、尚更なほさら憂鬱ゆううつになるというものであった。

「……ま、仕方ないことではあるんだが。やらなければこの国は滅ほろぶ……と言うと大げさだが、少なくとも、周囲の国から搾取さくしゅされ放題となるだろうからな」

青年は、その増えていく書類書類全てに目を通していくうちに、何故他国なせがこの国を狙ねらう状

況になっているのかを理解していった。

その理由は、端的に言ってしまうえば、元勇者である『彼』が既にこの国にいないことに、他の国が気付き始めているからであった。

西方の支配者が倒されたという驚きの報せが青年のもとに届けられてからひと月余り。さらには、辺境の街の冒険者が、特に被害らしい被害を出さずに、無数の魔物を撃退したという報せが入ってくる。

しかも退治した魔物の中には、高ランク冒険者でも倒せない成竜までもがいたようである。

そんな奇跡のような偉業が、次々と報告された以上、これがただの冒険者の手によって行われた、と信じる者はいまい。

『彼』の仕業だと推測するのは容易であり、『彼』が既にこの国を離れていると勘付かれるには十分な材料であった。

周囲の国々がこの国へ手を伸ばしてくるのも、当然だと言えよう。

魔王の残した傷跡は、どの国も癒えきつてはいないのだ。

少しでも国力を回復するために、他国に手を出すという考えに至っても不思議ではない。手を出されそうな身としてはたまったものではないが。

この積まれた書類の数々は、そういった事態を防ぐために必要なものでもあった。

「……ま、結局のところ、これは今まで私達が彼に頼りきっていた……いや、押し付けていた分のツケが回ってきた、っただけのことなんだが」

とはいえ、それはそれ、これはこれ、と言うべきか。

必要だと分かっただけでも、嫌な仕事には違いないが、今更何を言ったところで、結局やらなければならぬ。せめて憂鬱になることくらい許して欲しいものである。

「……頭の痛い問題が、もう一つ増えそうだしな」

「……何が？」

青年が吹き、再び溜息を漏らしたのとはほぼ同時に、少女の声が青年の耳に届く。

もつとも、彼女が部屋に入ってきたことは薄々分かっていたので驚きはない。

むしろ、少女がいる気配を感じたからこそ、敢えて吹いたと言うべきか。

部屋の入口に視線を向ければ、先ほどまでは誰もいなかったはずの扉の前に、予想通りの姿があった。

「なに、こつちの話さ。それよりも、どうした……っというの、聞くまでもないか……『彼』のところに行くのか？」

「……ん、約束の期限は過ぎた。そもそも、本当なら、あの日、に向かったはず

だった」

そう言いながら、明らかに怒気を含んだ目を向けてくる少女——Sランク魔導士のシルヴィ。

想定通りのリアクションに、青年は苦笑を浮かべた。

実際シルヴィは、あの日——辺境の街が無数の魔物に襲われた日、「彼」のもとに駆けつけるつもりだったのである。

あの街で何かが起こりそうだと予見し、助けに向かおうとしていたのだ。

実際は、街のためというよりは『彼』のため、——より厳密に言えば助けに向かうというのも建前で、それをきっかけに『彼』との距離を詰めることが狙いだったようだが——

「……でも、邪魔された」

「邪魔をしたつもりはないよ。こっちに残ってた方が『彼』のためになるし、結果的にはお前のためにもなる。前にもそう言ったし、シルヴィも納得してただろう？」

「……でも、結局今まで、何も起きなかつた」

「そりゃあな。むしろ何も起こさせないためにこそ、お前をここに留めておいたわけだしな」

「……？」

不思議そうに首を傾げるシルヴィを見て、青年は肩をすくめる。

まあ今までしっかり説明していないのだから、分からなくとも当然だが……この少女は、相変わらず、自分の価値を正確には理解していないようだ。

あるいは、単純に自分への関心が薄いだけなのかもしれないが。

「まあ要するに、お前は万一のための備えだったってわけだ。仮に何かあったとしても、こっちにはSランクの魔導士が控えてる、つてのを周囲の他国に示す必要があった」

「……この国のために？」

「いいや？ だから、言っただろ？ 『彼』のためだ、つてな。備えてるのは、同じところにあっても意味がない……『彼』がピンチの時に、お前も『彼』の近くにいたら、別の場所が発生したトラブルに対応できなくなるだろ」

「……もしかして、あの街には、あれ以上に何かが起こる可能性があった、つてこと？」

「少なくともその想定はしていたさ」

あの街で起こった魔物の騒動は、基本的には偶然の産物だ。

全てが良いように……もしくは悪いように連鎖した結果、あれほどの事態に発展した。どれだけ調べたところで、その結論にしか至らなかつた以上、そこに疑問を挟む余地はない。

だが、それはあくまで実際に起きた部分までの話である。

騒動を利用したさらなる企みがあった可能性も青年は予測していた。

途中までは偶然だったとはいえ、竜があの街を襲った結末自体は計画されていたのだから。

「ま、『彼』ならばそこまで含めて粉砕してたかもしれないが……『彼』だって人間だ。

その手が届かないことだって、きつとあるだろう。そしてそういう時に……こんなこともあるうかと、とか言って颯爽と登場するのは、物凄く格好いいと思わないか？」

「……思う」

シルヴィは真剣な顔で頷き、青年の言葉に賛同してきた。

ただ、直後にその表情が少し曇る。実際にはそうはならなかったからだろう。

何も起きなかったのはいいことではあるのだが、青年にはシルヴィの気持ちも少し理解出来た。

折角の備えに出番がなかった空しさは、彼も同感だったからである。

「ま、無駄になってよかったと喜んでおくべきだろう」

「……ん。ところで……結局、警戒してた相手は何？」

「ああ。そうだな……まあ、お前なら言っても問題はないだろう」

あまり大つびらに言うことではないが、この少女ならば言いふらすような真似はしまし  
 そう思い、青年はその名を口にするのであった。

「——邪神って知ってるか？」

## 第一章 聖神教と邪神

鬱蒼とした森の中に、不意の轟音が立つた。

同時に衝撃が森を揺らす、そこに住まうモノ達はそれに驚くことすらない。

この森では、日常茶飯事でしかないからだ。

魔の大森林。

辺境の街・ルーメンにあり、大抵の人間ならその禍々しさを恐れ、寄り付かない場所である。

その東端に位置する一角にて、今度は咆哮が轟く。

それは怒りを示すようにも……あるいは、恐怖を誤魔化そうとしているようにも聞こえる。

しかし、魔物の頭部が、首の上からずり落ちたのと同時に、咆哮もビタリとやむ。途端に静けさを取り戻した森の中で、ゆっくりと首が落ちていった。

そして、力を失った胴体も、音を立てながら続けてその場に崩れ落ちた。

「んー……さっきの魔物よりも下、かな？」

どこか暢気そうな声を漏らしたのは、たった今魔物を倒したばかりの少年である。

それに応える女性の声音には、多大な呆れが含まれていた。

「いや、さっきのより強いっす。普通に上つすよ……何で下だと思ったんすか……」

森で魔物を倒しながら、何やら話し合っているのは、ロイとフルールであった。

呆れを隠さず溜息をつくフルールに対し、ロイは不思議そうに首を傾げる。

「え……いやでも、さっき倒したやつの方が強いと思っただけど？」

「いやいや……さっきのはBランクの魔物で、今のはAランクつすよ？ まあ必ずしもランクが上の方が強いとは限らないっすが、少なくともさっきのと比べれば、明らかに今の魔物の方が上つす」

二人は、既にロイが倒した魔物と、今戦った咆哮を上げる魔物を比べ、どちらのランクが上なのか話しているところである。

結論を言ってしまうえば、フルールの方が正しいのだが、ロイは納得がいかないようだった。

再び首を傾げ、問いかける。

「うーん……そうかなあ……？ 確かに今の魔物の攻撃は当たれば痛そうだったけど、あんな大振りじゃ普通当たらないだろうし、その前の魔物の方が、動きが速かった分厄介じゃない？」

「大振りなのは否定しないですが、それでもBランクの冒険者じゃ歯が立たないからこのAランク扱いです。というか、当たったら痛いじゃ済まなくて、普通死ぬっす。直撃しなくともその余波だけで十分過ぎるほどの脅威になるっす」

「余波……余波ねえ……あれぐらいなら無傷で受け流せないかな？」

「だからそれが出来るのはロイさんぐらいっすよ。何度も言ってるっすけど、そろそろロイさん基準じゃなくて、あちし達を基準に考えて欲しいっす」

「一応心がけているつもりなんだけど……面目ない。常識を学ぶっていうのは本当に難しいなあ……もうひと月も経つっていうのに」

ひと月。

それは即ち、ロイがフルールから冒険者としての……あるいは、この世界の人間の常識を学ぶようになってから経過した月日だ。

周囲と異なる常識を持つロイに、これ以上振り回されなくて済むように、とギルドの提案で始まったのだが……その成果はご覧の有様である。

正直なところ、以前の彼との差はそれほどない。

知識量だけで言えば、ひと月前とは、比べ物にならない。

それはフルールが役目を果たそうと、このひと月の間、懸命に努力してきたからであり、重点的に教わった魔物に関しては、ロイも正しい認識を持てるようになっていた。

だが問題は、それが所詮知識でしかなく、実戦でいまいち活用出来ないことにある。こればかりはフルールの責任とは言えず、ロイ自身の経験が伴っていないので仕方なかった。

彼らがこうして魔の大森林へとやってきているのも、そのロイの欠点にフルールが気づき、補うことを目的としたもの……まあ、今のところ、上手くいっているとは言いがたかったが。

そのことを何よりも実感しているフルールが、嘆息する。

「あちしも常識を教える難しさを心の底から痛感してるっす……というか、この役目、あちしに向いてないと思うっす」

「いや、そんなことないと思うけど？ 僕が言っても説得力はないかもしれないけど、フルールは教え上手だよ」

「そう言ってくれるのはありがたいっすけど……所詮あちしは下っ端っすよ？ 確かに面



倒なことは下っ端にやらせるべきってのも分かるっすが、下っ端だからこそ、やらせる仕事は選ぶべきだと思うっす」

「フルールが下っ端だったら、大半の冒険者はそれ未満になっちゃうけどね……」

下っ端、という言葉は、フルールがロイと出会った時から度々口にしてきているものである。彼女が本心からそう言っていることを知るロイからすると、複雑な心境になってしまう。

自身の実力に単に無自覚なロイとは違い、フルールは自分に対する評価が低いのだ。

しかし、彼女がどれだけ自分を低く見積もろうと、優秀な冒険者である事実が変わらない。

ギルドがフルールにロイの教育係という役目を与えたのも、その能力を買ったことだ。その理由は単純明快。今のギルドで一番高ランクの冒険者であるフルール以上に、信用出来る者などいるはずがないからだ。

「まあ、でも仕方ないんじゃないかな？　今やあの街には、Aランクの冒険者ってフルールしかないわけだしね」

「そもそもそれがおかしい話なんです……ランクなんか気にせず、グレンさんあたりに振っても別にいいと思うっす」

そう考えるフルールの気持ちも、ロイとしては分からなくもなかった。

しかし、ランク——すなわち冒険者としての信用度が最も高い彼女に引き受けてもらう必要があったのもまた、事実なのだ。

「まあ、ギルド側としてはやっぱりそれは出来ないんじゃないかな——グレンさんはBランクに降格することになっちゃったわけだしね」

基本的に冒険者のランクというのは、ギルドがそのランクに相応しいと判断して定められるものであり、余程の事情がない限り降格することはない。

降格を言い渡すのは、自分達の目が間違っていたと認めるのに繋がりが、ギルドとしてもリスクを負うからである。

その中でも、話に出たグレンは元Aランクだ。

Cで一人前、Bで一流とされる中、そのさらに上となる、超一流のA。

その立場に相応しいと一度は認めておきながら、それを取り消してしまったら、ギルドの信用問題に関わってくる。

しかし、彼とフルール以外の四人のAランク冒険者が、いずれもギルドを裏切り、悪事を働いた。その四人というのが、いずれもグレンのパーティーに所属していた冒険者だったため、リーダーである彼が、その責任を取るという形で降格したのである。

「というか、まずそこからしておかしいんすが……パーティーとして行動してた時のこと

ならばともかく、個々人の所業しよぎょうの責任をリーダーが取る必要なんてないじゃないですか」

「まあ実際ギルドも、フルールと同じ主張をしてたしね」

だがその意見が通ることはなかった。

当事者であるグレンが、自分が責任を取るべきだと頑かたなに主張したからだ。

「普通は責任から逃げようとすると思うんだけどね……というか、あの様子からすると、グレンさんは責任を取ろうとしたっていうよりは、降格したがつてたように見えただけど……」

「いや、多分それで合ってるっすよ。グレンさんは面倒見がよくて責任感もある人っすけど……初めからAランクでいたがつてなかったんすよね。Aランクである以上は責任を果たすけど、出来ればそんな責任は最初から負いたくない、といったところっすかね。今回のは、そういう意味で色々都合がよかった、つて感じだったんだと思うっす」

「なるほど……それで、結果的にフルールは全てを押し付けられた、と」

「そういうことっすねえ……！ 本当に、何であちしがこんな目に、つて感じっすよ！」  
実のところ、フルールもまた、グレンが責任を取るならば自分も取るべきだろう、と言つて降格しようとしていたのだ。

だがそれはグレンとギルドの両方から否定された。

グレンからは「自分が責任を取るのだからそれ以上は必要ない」と言われ、ギルドからは「裏切られた被害者の立場だったのだから、責任を取る理由は発生しない」と断言だんげんされた。

もつとも、ギルドからすれば、フルールまで降格してしまったら困る、という理由の方が大きかったのだろうが。

どんなに大きな街でも、Aランクのパーティーともなれば一組か二組程度しかないのが普通で、実際彼らが住むルーメンもそうである。

しかし、そのうちの片方は、元Sランクの冒険者によつて一人を残して殺されてしまい、グレンが率ひきいていたもう片方も半数以上が裏切りにより離脱りだつ。

無数の魔物が襲撃しゆうげきしてきたあの大事件の際には、Aランクの冒険者はグレンとフルール、そして別パーティーの生き残りの一人の、合わせて三人しかいなかったのだ。

そして事件後、グレンがBランクへと降格した頃には、生き残った方のAランクも既に街を後にしていた。

パーティーメンバーがいなくなつてしまった上、今回のことで自分の未熟さを痛感したため、他の街で鍛え直してくると去つてしまったのだ。

したがつて、今や残るAランクはフルールのみ。

Aランクの冒険者が一人もいないというのは、ギルドの面子メンツを考えるとさすがにまずいということ、フルールの降格は認められなかった。

「でも唯一のAランクだったことで、色々と優遇ゆうぐうされてる面もあるって聞くけど？」

「それはまあ……まったく言わないですけど。それでも、どう考えても苦勞くろうしていることの方が多いです」

顔をしかめるフルールだが、本気で嫌というわけではないはずだ。

グレンが降格したため、彼とは既にパーティーを解消したとロイは聞いている。

それ以来誰ともパーティーを組んでいないとも聞いたので、フルールはやろうと思えば、すぐにでも別の街に移れるはずだ。

それをしないということは、少なくとも心底嫌だと思っっているわけではないのだろう。

まあ単純に、責任感が強いということかもしれないが……

ギルドがグレンの降格を認めたのは、フルールがこの街を離れないという計算もあったのかもしれない。

何はともあれ、とロイはフルールの方を向いた。

「苦勞くろうをかけてる要因の一人としては、それに關しては何とも言えないところかなあ……」

「別にこの一件で、ロイさんに悪いところはないですけどね。最近、頑張がんばってくれてるの

は分かっているからです。ただ、それは別にして、もつと常識を理解出来るようになって欲しいです」

「僕も本気でそうしたいと思っただけだね……」

だが思うだけでどうにかなるならば、とうとうにどうにかなっている話だ。

溜息を吐くフルールに、ロイは苦笑にがわらいをする。

「さて、いつまでも愚痴ぐちを言っでも仕方ないし、そろそろ建設的なことを話すとしてよいか。具体的にはこの後のこととか。まだ続けるんだらうしね」

「まあ、そうっすね。今更言っでもどうにもならないことっすし。でも、生憎あいにく今日はこれで終わりっす」

「あれ、そうなの？」

思わぬ返答を受け、視線を空に向けるも、日はまだ高く、昼を少し過ぎたあたりだった。終了するにはまだ早いように感じる。

生い茂しげった木々によって視界が遮おさられているため、正確なところは分からないが、およその時間は把握はあく出来る。いつもならば、もつと遅おそくまで残っているのだが――

「忘れたんすか？ 今日ギルドに『お客様』がやってくる日っす」

「あ……そっか。そういう日は今日だったっけ？ ごめん、近いうちだったのは覚えてた

んだけど、正確な日時はすっかり忘れてた」

「まあロイさんには関係ないことっすからね。あちしが呼ばれてるっただけっすから、細かいことは忘れてても仕方ないっす。ちなみに、誰が来るのかっつてのは覚えてるっすか？」

「さすがにそれはね。確か、『聖神教』の人……で、合ってたよね？」

「正解っす。しつかり覚えてたっすね」

「ま、この間教わったばかりだからね」

魔物のことに限らず、ロイはフルールから色々なことを学んでいる。

各国の名前や歴史、それぞれの土地で信仰されている宗教の知識に至るまで、その内容は多岐にわたっていた。

『聖神教』もフルールから教わったものの一つで、ロイはその名をつい先日知ったところだった。

「とはいえ、詳しいことはよく分かってないんだけど。僕が聞いたのは、創造神を崇めてるってことぐらい、かな？」

「ま、宗教組織なんて、土着のものとかも含めたら山ほどあるっすからね。詳しく説明したら時間がいくらあっても足りないっす。それに組織と言っても、『聖神教』は一地方の人達が教えを信じてるぐらいで、大きいとはとても言えないところっすし」

「でもその人達を出迎えるために、わざわざフルールに声がかかったわけでしょ？」

何でも今日はその聖神教の人物が、ルーメンを訪れるというのだ。

理由はフルールも知らないらしいが、少なくとも遊びに来ただけということはあるまい。そして何故かその場に、フルールも呼ばれているのだという。

「あそこは規模は大きくないんすが、歴史はあるんすよ……それに、色々と特殊なところでもあるんすよね。何でもギルドの設立にも関係してるって話みたいっす。だから礼儀として、Aランクの冒険者を同席させといった方がいい、ってことらしいっすね」

「へえ……ギルドの設立に？」

「半ば噂話っすけどね。まあ気になるようなら調べてみるといいと思うっす。あちしから教えることは多分ないっすから」

「なんで？」

「ロイさんに教える『常識』には入らない、特殊な話っすから。あそこと関わるようなことでもあったら話は別っすが、多分ないっすしね。何ととっても、基本自分達の拠点から出てこないやつらっすから」

「そうなの？ でも今回はそういう人達がわざわざ訪ねてくるんだよね……？」

「つまりはそれだけの用件があるってことだと思っす。そしてあちしはそこに同席す

るってわけっすよ。まったく……本当に面倒事ばかり回ってくるっすね……」

「それは……ご愁傷様、と言っうしかないかな」

本気で嫌そうな表情を浮かべるフルールに、ロイは苦笑しながらそう返す。

自分が代わられる内容でもあるまいし、ここはフルールに頑張ってもらっうしかないだろう。

「さて、そういうことなら、さっさと帰ろうか。遅くなったら向こうに失礼だしね」

「そうっすね。一応余裕は持つてるつもりっすが、向こうが早めに来たら分らないっすから」

それは確かにありえる話であった。

そもその話、ロイはフルールの世話になってる身だ。

彼女がどう考えようと、その意向に異を唱えるつもりはなかった。

そうしてロイ達は魔の大森林を後にすると、そのまま辺境の街に戻る。

しかし、ロイはギルドに着くや否や、

「……ねえ。あんたでしょ、勇者ってのは？」

と、冒険者ギルドにいた一人の少女に尋ねられるのであった。



ギルドの雰囲気（ふんいき）がいつもと違うことにロイが気付いたのは、到着した直後のことであつた。

騒（さわ）がしいだけならいつものことだが、普段と異なり、戸惑（とまど）いの空気が漂（たな）っているように感じたのだ。そしてすぐに、ロイはその感覚が間違（まちが）いではなかったと理解する。

冒険者達の戸惑いの原因となつているだろうものを、見つけたからである。

それは、見覚えのない一人の少女であつた。

少し吊（つ）り目（め）がちで、その顔立ち（おなもち）は非常に整（ととの）っている。

だが、冒険者達が戸惑（とまど）っている理由は、その美しさ（うつくし）さではあるまい。

さすがにその程度で動揺（どうごう）するほど彼らは純真（じゆんしん）ではないし、何よりも彼女には、それ以上に目を引く要因があつたからだ。

金色（きんいろ）に輝（かが）く髪（かみ）と瞳（ひとみ）。

それらはロイが今まで生きてきた中で、一度も見（み）たことがないくらいには珍（めづ）らしいものであつた。

この場には様々な色の髪（かみ）や瞳（ひとみ）を持つ者がいるが、一人として金の色彩（しき）を持つ者はいない。付け加（く）えて言うならば、その顔にはもう一つ周囲（しゅうい）の目を惹（ひ）く特徴（とくちょう）があり……と、そんな

ことを考えながら、ロイが少女のことを眺（なが）めていた時のことであつた。

不意（ふい）に少女（せうじよ）が彼（かれ）の方（かた）へ視線（しせん）を向（む）けたかと思（おも）えば、そのまま近寄（ちかよ）ってきて、いきなり尋ねてきたのだ。

——お前（まへ）が勇者（ゆうじや）なのだろう、と。

それはあまりにも唐突（たうとつ）な問（と）いであつた。

ちよつとぶしつけに見（み）すぎていた自覚（じかく）はあつたため、文句（ぶんく）を言（い）われるのだとばかり思（おも）つていたのだが……

そんな突飛（とつひ）な質問（ちつもん）を受けたからだろうか。

「——いえ、違いますけど？」

ロイは反射的（はんしゃてき）に否定（ひてい）してしまふ。

「……え？」

明らかに確信（かくしん）を持つて問（と）いかけていただけに、少女（せうじよ）は困惑（くわんごつ）していた。

少女（せうじよ）の浮か（う）かべる表情（へいしやう）が、徐々に戸惑（とまど）いから焦（あせ）りへと変化（へんか）していく。

「え、嘘（うそ）……本当（ほんとう）に……？ 違（ちが）う、の……？ え、えっと、その……ご、ごめんなさ  
い……！」

そう言（い）つて謝（あやま）ると、少女（せうじよ）は素早（すみぞ）くその場（ば）から離（はな）れて行（い）つた。

間違えたのが余程恥<sup>は</sup>ずかしかったのか、耳まで真っ赤<sup>か</sup>になっているのが後ろ姿からも見て取れる。

そのまま受付の方へと向かっていく少女の姿を何となく眺めていると、横から視線を感じた。

目を向けてみると、フルールがジト目で彼を見ている。

「うん？ どうかした？」

「いや……何で今嘘吐いたんすか？」

「いや、別に嘘吐こうと思ったわけじゃないんだけどね……ただ、唐突だったから、思わず、っていうか……？」

今までずっと自分を大したことないと思っていて、自身が勇者という認識を持っていなかったせいだろうか。

つい咄<sup>とっさ</sup>嗟に否定してしまったのだ。

それに――

「あとは、彼女の見た目に驚いて、質問をちゃんと聞けてなかったのもあったかもしれないけど。初めて見たんだけど――あの人って、エルフだよね？」

言いながら視線を少女へと戻せば、未だに赤い――その特徴的な尖<sup>とが</sup>った耳がよく見える。

それに何よりも、少女の持つ金の髪に金の瞳。

その二つは、エルフのみが持つことを許されたものであった。

「まあそうっすね。というか、あちしも見るのは初めてなんすけど」

「あれ、そうなの？ 色々な国や街に行ったことがあるって前に言ってたっけ？」

「冒険者ってのは基本的にあちこち飛び回ってるっすからね。でも以前にも話したと思うんですけど、エルフは基本自分達の森から出てこないっすから。こうして目にするのは大分稀<sup>まれ</sup>なんすよ」

「そうなんだ……」

これも、フルールから学んだ内容ではあるが、国について教わった際、ついではばかりにそこに住む人達――『人種』――の説明も受けたことがあった。

たとえば、北の方にはエルフの住む森があるとか、その周辺は獣人達も多く暮<sup>く</sup>らしているとか、この周辺にはロイやフルールと同じ『人類種』しかないとか、そういう内容である。

さすがに色々な人種がこの世界に住んでいること自体は知っていたが、詳しく聞いたことはなく、会ったこともなかったため、実物のエルフを目にして、ロイはかなりの驚きを感じたのである。

そんなことを考えていると、何やら受付の方で、先ほどの少女が、どうということよ!と叫んでいた。ふと隣から溜息を吐く音が聞こえる。

横を見れば、フルールの顔には、名状しがたい表情が浮かんでいる。

それを敢えて言葉にするならば……疲労と諦観を混ぜ合わせたようなもの、といったところだろうか。

「どうしたの? 何とも言えないような顔になっちゃってるけど……」

「いや……ちょっと気付かなくていいことに気付いちやっただとかっすね。エルフは基本、自分達の森から出てこないって言ったじゃないっすか?」

「うん。自分達が生まれ育った環境で暮らしていくことに満足してるからだっただけ?」

「エルフは数千年を生きる長命種つすから、あちし達に比べてあまり変化を求めようとしない、つてのもあるらしいっすけどね。でもそんなわけで、エルフが森から出てくるとすぐ話題になるんすよ」

「珍しさから?」

「それもあるっすけど、エルフは魔力が豊富で魔法が得意でもあるっすからね。あちし達とは少し常識が違ふところもあるせいで、色々な意味で噂になりやすいんす」

どこかで似たような話を聞いたことがある気もしたが、話の先を促す。

森から出てきたエルフが噂になりやすい、ということとは、フルールは彼女が何者であるのかに気付いた、ということだろうか。

フルールはAランクの冒険者である。

おそらくは、ロイの想像以上に様々な経験を積んでいるはずだ。

そのフルールがこんなに疲れた表情を浮かべるほど、あの少女は厄介な存在なのだろうか。

一体何者だということか。

そんなロイの思考を読んだかのように、フルールは話を続ける。

「それで、っすね。実は、最近聖神教にエルフが加わったって話を聞いたのを、ふと思ひ出したんすよ」

「聖神教に? ああ……ということとは、もしかしてあの人がお客様ってこと?」

「……それだけなら、よかつたんすがね」

そこで一度言葉を区切ると、フルールは大きな溜息を洩らした。

そして、出来れば口にしたくないと言わんばかりの表情で続ける

「そのエルフは、聖神教の信者からはこんな風に呼ばれてるらしいっす——聖女様、と」  
聖女、という言葉はロイにとって聞き慣れないものであった。



フルールから教わったことの中にも存在してはおらず……だが、それが歓迎すべき存在でないことぐらいいは、フルールの様子を見れば分かる。

そして聖神教の関係者というのであれば、今回フルールが呼び出されたことと無関係ではあるまい。

「……まあ、うん。本当にご愁傷様、つてところかな」

生憎と、ロイにはそれ以外に言えることはなかった。

フルールもそれは分かっているのか、疲れたような顔で苦笑を浮かべる。

「ま、面倒事が待ってるんだらうつてのは分かってたつすから……今更って言えば今更つすけど」

「それはそうなんだろうけどね。ところで、厄介そうな相手だつてのは分かったんだけど、具体的にはどういう感じなの？ その聖女様っていうのは」

「んー、あちしもそこまで詳しいわけじゃないんすが……確か、聖神教の教えを体現してる人のこと、とかだったはずつすね。立場に関して言えば、まあ言葉通りって感じつす」

「なるほど……」

聖神教の教えがどういうものなのか分からないので、それに関しては何とも言えないところだが、少なくとも立場が低いということはなさそうだ。

「そんな人が来るなんて、本当にどんな用件なんだろうね？」

「どうなんすかねえ……つていうか、随分他人事じゃないつすか」

「いや、実際他人事だしね」

「いやあ、分からないつすよ？ だつてあの人、ロイさんに声かけてきたじゃないつすか。ということ、ロイさんも関わる可能性は十分あると思うつす」

「まあ確かに何のために訪ねてきたのか分かってないから、可能性がないとは言い切れなつけどさ……」

と、そんなことを話していた時のことであつた。

件の少女が戻つて来たのだ。

その目は先ほどよりも吊り上がつており、怒っているのが一目で分かる。

「ちよつと、やつぱりあんたが勇者で合つてるんじゃないのよ……！」

その言葉を聞き、少女がやつてきた方向に目を向ける。

そこには見慣れた顔の受付嬢の姿があつた。

ロイを見て肩をすくめているあたり、どうやら彼女が教えたようである。

少女はお客様なのだし、ギルドのスタッフが嘘を吐くわけにはいくまい。

そもそも誰が悪いのかと言えば、咄嗟のこととはいえ、嘘を吐いてしまったロイである。

責められる理由はあっても、責める理由はない。

それよりも、目の前の少女に何と言い訳をしたものか。そう思っていると、フルールが助け舟を出してくれた。

「ちよっと横から口出すことになるっすが、実はその人、最近まで自分が勇者だって自覚がなかったらしいんすよね。それで、さっきは咄嗟に否定しちゃったみたいっす」

「ええ、実はそうなんですよ……すみませんでした」

さすがはフルール、こういう時のフォローもばっちりだと思しながら、ロイは便乗する形で頭を下げる。

本人は自分をことあるごとに下っ端だと言っているが、こういうことがさり気なく出来るあたり、やはり優秀なのだ。

もつとも、それで相手が納得してくれるかは話が別であるが。

ここまでのやり取りを聞くだけでも、気の強そうな人物だというのは分かるし、あと何度か頭を下げる必要があるかもしれない。

そう思った直後のことであつた。

こちらの言い分を聞くと、意外にも少女は臍ふに落ちたような顔を見せたのだ。

「ああ、そうだったの？　なら仕方ないかしらね……」

「……今の説明で納得するんすか？」

「周囲は自分のことを特別だと思ってるけど、自分はそう思っていない。分からなくはないわ。勇者って名前が世間に広まったのは一年以上前のことだけど、最近自覚したってことは、しばらくは自分が勇者だなんて思いもしていなかったってことでしょ？　なら、そういうことになつても不思議じゃないって思うもの」

そう言って肩をすくめた少女を見て、ロイは、もしかしたら彼女も似たような経験があるのかもしれないと考える。

実感のこもった言葉のように聞こえたからだ。

そして、少女が本当に聖女と呼ばれているというのなら、もしかしたら、その実感はそこに関係していることなのかもしれない。

とはいえ、敢えて詳しく尋ねる気は起こらなかった。

それはどう考えても、自分から厄介事に首を突つ込むのと同義だからだ。

だから、次にロイが口にしたのは別の言葉であつた。

「納得してくれたのならありがたいんですけど……それで、僕に何か用があつた、ということでもいいんでしょうか？」

「用というよりは……どちらかと言えば、単に一度会つてみたかつた、つてだけのこと

よ？ 勇者がここにいるっていうのなら、そう思うのは当然でしょ？ —— 少なくとも、今はそれだけよ」

最後にどことなく意味深な言葉を告げながら、少女は再度肩をすくめる。

そしてそのやり取りで満足したのか、そのままさっさとどこかへ去って行ってしまった。どういいう意味なのか気にはなったものの、さすがに追いかけるわけにはいきまい。

そしてフルールもフルールで、ギルドに来たのはお客様であるあの少女達を迎えるためである。

どことなく疲れたような、何かを諦めたような表情を浮かべながら、少女に合わせるように去っていった。

一人残されたロイは、何となくその場を見渡す。

見慣れぬ少女が姿を消したことで、冒険者達もいつもの様子を取り戻しつつあるようだ。

そんな光景を眺めながら、それにしても、と思う。

この街にやってくる冒険者達は、基本的に腕利きの冒険者ばかりだということを、既にロイは理解している。

つまりは、それぞれが相応の経験をしているということで、だがそんな彼らにとっても、エルフの姿を見かけるといのは相当に珍しいことであつたらしい。

先ほどの戸惑いが、その証拠だ。

そして、そんな人物がわざわざここにやってきた。

しかも、外に足を運ぶのは珍しいと言われている聖神教の関係者として。

となれば、果たしてどんな理由で来たのか気になるところではあるのだが——

「……ま、僕が気にすることではない、か」

それに関して考えるのは、ギルドの、そしてフルールの役目だ。

頭を軽く振って、考えていたことを追いやると、自分のやるべきことを果たすため、受付に向けて足を動かした。

そもそもロイが今回ギルドにやってきたのは、フルールの付き添いなどではない。

魔の大森林で倒した魔物を換金するためであった。無駄に手元に残しておくより、換金した方が都合がいいと考えたのである。

ここひと月の間で、すっかり見慣れた受付嬢の下へと辿り着き、まずは挨拶でもしようと思つたのとはほぼ同時に、受付嬢が口を開く。

「や、さっきはすまなかつたね」

先ほどのあのエルフの少女に、自分のことを教えたことだろう。

別に気にしてもいないし、受付嬢からすれば尋ねられたことに答えただけで、問題はな

いと思うのだが……その律儀な態度に苦笑を浮かべる。

「いえ、そちらの立場からすれば仕方ない……というか、当たり前のことだと思えますから」

「そうかい？ まあ実際のところ、確かにボクの立場からすれば、彼女に嘘を吐くわけにはいかなかったんだけど……キミのことを勝手に教えてしまった事実には違いないわけだしね」

「特にそれで迷惑らしい迷惑を被ったわけでもありませんから」

そもそもあの少女からされたことといえば、多少話しかけられたぐらいだ。

その程度のことを迷惑と感じるほど、ロイは狭量ではなかった。

「そう言ってくれると助かるんだけど……それだけだとボクの気が済まないかな」

「本当に気にしなくていいんですけどね。いつも世話になってますし」

「それがボクの職務だからね。それこそ当然のことで、それを理由に何かをチャラにするようなことがあったら、むしろその方が問題さ。とはいえ、お返しに出来ることも少ないからなあ。じゃあ、詫び代わりというわけじゃないけど、今何か知りたいことがあったりしないかい？」

「知りたいこと、ですか？」

「困ってること、って言おうにも、キミが困るようなことをボクがどうにか出来るとも思えないし、あまり深く関わりすぎでしまうと、今度は職務規定の方に抵触しちゃうしね。その辺が落としどころかな、と。もちろん、何でも答えられるわけでもないけどね」  
本当に気にする必要はないのだが……冒険者ギルドの職員として、変に借りを作りたくない、ということなのかもしれない。

受付嬢は冒険者に深入りしないよう、一定の線を引いていると聞く。

それは特定の個人を最優先してしまわないためであり……冒険者の命が安いためでもある。送り出した冒険者が戻ってこなくとも構わないように、あらかじめ距離を置いておくのだ。

そういうことならば、ここは遠慮せずに尋ねておいた方がよさそうである。

幸いにも、ちょうどロイには気になっていることがあった。

「じゃあ……折角ですから、お言葉に甘えて」

「うん、ボクを助けると思っ、是非そうして欲しい」

「えっと、さっきの人なんですが……聖神教の人、って聞きましたが、合ってますか？」

「うん？ どうしてそれを……って、ああ、フルールちゃんから聞いたのかな？ そうだね、その通りだけど……まさかそれが知りたいこと、ってわけじゃないよね？」

「まあ一応の確認ですね。それで、もう一つ聞きたいんですが……彼らは、本来あまり外に出ないって聞いたんですけど、それも合ってますか？」

「ふむ……どちらもその通り、だね。なるほど、キミが何を聞きたいのか大体分かったよ。うな気がするなあ……それで？　キミはそれらの情報を前提とした上で、何を聞きたいんだい？」

「彼女が……いえ、彼女達が、何をしにここに来たのか、ということですよ」

そう、ロイが聞こうとしたことは、先ほどのフルールとの話に関連することであった。まあ、ないと思いたいが、この街に来たということは、自分も何らかの形で巻き込まれないとも限らない。

ならば、多少情報を入手しておいても損はあるまい。

と、そう思った、のだが――

「んー……ま、いいかな。本当は部外者に話せない情報もあるんだけど、どうせキミは無関係じゃいられないだろうからね。キミ自身も薄々気付いているようだけど。むしろ後々のことを考えれば、キミも知っておいた方がいいだろうし、うん、これは確かに色々な意味でちょうどよかったかな？」

「え……？」

## 立ち読みサンプル はここまで

何やら意味深な言葉を並べる受付嬢にロイは困惑するが、彼女は気に留めない。

にっこりと笑みを浮かべると、そのまま話を続けた。

「――邪神。端的に言ってしまうならば、彼女達がここに来たのは、それが理由ってところかな」



受付から離れたロイは、思わず息を吐き出した。

一通りの話を聞いた……というか、聞かされたことで、さすがに僅かな疲れを感じたのだ。

とはいえ、聞かなかった方がよかつたとは思わないし、色々とためになる情報を得ることは出来た。

それに、受付嬢の言っていたことも、間違いではないのだ。

好き好んで首を突っ込もうとは思わないが、確かに、何らかの形で関わることになるのだからと、覚悟していたのは事実である。

関係者のあの少女がわざわざ自分に話しかけて来たのだ。